

密教浄土教における「往生浄土」の様相

中央仏教学院講師 浅田 正博

(一) 密教浄土教とは



一般に日本の浄土教には三流を数えています。比叡山を中心として展開された浄土教が「叡山浄土教」で、有名な恵心僧都源信がいます。そして、奈良仏教の中心教学の三論宗や法相宗の内部に付随して展開された浄土信仰に「南都浄土教」があります。三論宗の「珍海」や「中川実範」などがいます。そして、第三に高野山を中心とした浄土信仰、これが「密教浄土教」です。中心の人物は覚鑿上人でしょう。これら三流の内、叡山浄土教がその主流であるのは多くの人の認めるところですが、これらの内、あまり皆さんが注目しない高野山における浄土教信仰の形態を見ることにしたいと思います。

いうまでもなく高野山は空海(774~835)によって創設された真言密教の本山です。密教は「即身成仏」を目的とした教えです。「即身」とは、「私の肉体を持ったこの身のまま」という意味です。また「成仏」とは「仏となる」ということですから、「即身成仏」とは「この身このままで仏になる」ということです。そこには死後に浄土に生まれるという思想は見られません。ところが一般に云う「浄土思想」とは、死後に西方の阿弥陀浄土に往生することによって成仏を期する思想ですから、これら両者は全くかけ離れた内容と云って良いでしょう。高野山を開かれた弘法大師空海には西方願生の往生思想はなかったと見られています。そうすれば「密教浄土教」という用語自体、真言教理にかなっていない熟語ということになります。ここに高野山における浄土教の複雑さがあります。

最初に真言宗では「阿弥陀如来」をどのように理解しているのかを見ておきましょう。浄土思想を説かないのならば「阿弥陀如来」を否定するかというところではありません。金剛界曼荼羅や胎藏曼荼羅では中尊の大日如来の西側に描かれていますし、所依の經典の『大日経』や『金剛頂経』にも阿弥陀如来は説かれています。しかし極楽浄土に往生するという思想はないのです。浄土真宗の私たちにとって少し合点がいきませんが、これはいったいどういうことでしょうか。

密教教義によりますと、大日如来を「普門万徳の尊」と呼んで、よろずの徳を具えた法身仏としてあがめます。法身仏ですからいわば宇宙の仏でもありますし、全ての仏を統率する仏でもあります。ところが、大日如来が全ての密教寺院の本尊であるかというところ、これはまたそうではありません。密教寺院の本尊として、むしろ大日如来を安置しているお寺は少ないのです。釈迦如来や薬師如来であったり、観音菩薩や普賢菩薩であったり、あるいは大黒天や弁天さんであったりご本尊は本当に様々です。ですから当然な

がら阿弥陀如来がご本尊というお寺もあります。このように密教寺院ではどのような仏様であったとしても本尊として安置することができるのです。

これはどの仏もが大日如来という万徳尊の一部の徳を表現した仏として見るからです。ここを「一門別徳の尊」と表現しています。大日如来以外の諸仏は、大日如来に統率される「一門」なのです。そして大日如来の一部分の「別徳」を表している一尊に過ぎないのです。ですから、阿弥陀如来も大日如来の別徳である「無量寿の徳」という一部を表現した仏にすぎないと見るのです。これは観音菩薩や大黒天にも云えます。要するに見方を変えれば「阿弥陀如来がそのまま大日如来である」ともいえましょうし、「観音=大日」、「大黒天=大日」とも云えるわけです。ここに密教における諸仏観があります。

密教が「即身成仏」を目的とすることは、つまるところ、私がおののまま大日如来となり、大日如来がそのまま、この私に成ることです。これが「入我我入」の境地であって、大日如来と阿弥陀如来とが一体であるならば、「我と阿弥陀」とが一体となるのが即身成仏の境地であるといえましょう。この「即身成仏」の世界…それが密厳浄土と呼ばれる「この世の浄土」すなわち「密教の浄土」なのです。ですから、特に死後、西方極楽浄土に往生して成仏するなど主張する必要がないのです。

ところが「叡山浄土教」の大成者の源信(942~1017)が『往生要集』を著しますと、たちまち方々に影響を及ぼします。それは他宗派も同じことです。そして当時の末法の時代観も手伝って、西方浄土願生の機運が盛り上がります。当然ながら高野山にもその影響が及ぼされたのです。

特に高野山では、古来より山中他界の民俗信仰がありました。「山中他界」とは「高野山という山の中は死後の世界」という信仰です。ですから奥の院には今日でも多くのお墓があるのはそのためでもあるのです。この民俗信仰は「即身成仏」を主張する「この世の浄土」とあいまって、浄土信仰を助長することになります。いわば一見「浄土信仰」が普及するはずのない密教の高野山に、浄土信仰を育む土壌があったのです。しかし、教義はそうではありません。密教独自の「即身成仏思想」と、時代風潮の「来世往生思想」とは相容れることの出来ない思想ですから、これを如何に融合するかが教学上の問題となったのです。

このような時期に現れたのが覚鑿(1095~1143)です。彼は『五輪九字明秘密釈』や『一期大要秘密集』などを著して、密教思想と念仏思想との融合を追求しました。すなわち大日如来がそのまま阿弥陀如来であることを一歩進めて、大日如来の密厳浄土が阿弥陀如来の極楽浄土そのものであると述べ、密教で説く即身成仏が、そのまま極楽往生であると主張したのです。

(二) 『孝養集』という密教浄土教の書物

『孝養集』という一冊の書物があります。これは実際に覚鑿が著したのではなく、室町時代に覚鑿に仮託されて成立したと見られていますが、内容

は「往生極楽の要」を母親に対して著した「密教の念仏」、いわゆる「秘密念仏」の教えです。そこには『往生要集』の影響が多分に見られますし、『法華経』の引用まであって、叡山浄土教の影響下に著されたことがわかるのですが、一方では覚鑊晩年の『一期大要秘密集』や空海の書物なども引かれていますので、天台系の学者の著作ではなく、秘密念仏の興隆をはかった高野山関係者の作であろうと考えられています。いわば本書こそ覚鑊以降における密教浄土教の一つの成果とも思える書物です。そこで本書から密教浄土教の特色を探ってみたいと思います。

本書は三巻から成っており、文体は平易な仮名交じり文です。覚鑊が31歳の時に母親に送った「孝養の書」との設定ですのでこの名があるようです。

上巻には「善悪を明す」として、悪業を行えば地獄に墮ちることなどが強調されています。内容からして『往生要集』の「厭離穢土の六道」をベースとして書かれていることがわかりますが、その中には、空海の『十住心論』が引用されているのが目につきます。

中巻では「実の道を顕す」として、三界六道を厭って、往生極楽のために念仏すべきことを勧めます。特に「往生極楽を欣う」では、『大経』『観経』の両経並びに『浄土論』を引用し、善導和尚の文を掲げて浄土の様相を紹介し、そして西方極楽は「諸々の浄土の初門」とであると位置づけています。

下巻は、「臨終正念、往生極楽の意を明かす」で、「往生極楽は臨終正念にまかせたり」として「臨終」を強調し、阿弥陀仏を迎える来迎の儀式までもが詳細に記されています。そして最後部分に割り注して「法華経・阿弥陀経・観経・双巻経。多くは往生要集の心による」とまとめています。

以上からしますと本書は、叡山浄土教が密教浄土教に多大の影響を与え、浄土思想に関しては『往生要集』を主軸としてその後も展開したことを知る貴重な文献であることがわかります。

(三) 往生を妨げる「魔縁」

そこで本書の思想的特色は何処にあるのかを探りたいと思います。要するに『往生要集』の影響下に作成されたとはいうものの、『往生要集』に見られない密教独自の思想がやはり見て取れるからです。

私が一番最初に興味を抱いたのは「臨終の重要性」を説く箇所です。もちろん『往生要集』にも「臨終行儀」が記載されていますが、本書ほどに具体的ではありませんし、密教の重要性には触れていません。ところが本書の下巻にはこれが十項目にわたって詳細に記されているのです。その中に密教浄土教の特色が現れているのです。まず、その項目名を羅列してみましょう。

- ①かねてから臨終の用意あるべき様
- ②道場を蔽るべき様
- ③善知識あるべき様
- ④病人に順って勧めるべき様
- ⑤病人をして苦しむべからざる様

⑥かねてより十念を習うべき様

⑦正しく最後の一念によって往生をなすべき様

⑧仏と聖衆、来迎の様

⑨浄土に生まれ楽を受ける様

⑩浄土に生まれ娑婆に帰って、縁ある人・衆生を浄土に導く様

これらのうち「③善知識あるべき様」にその特色が見出せます。要するに、善知識として三人もしくは五人の知識を病人の枕辺に招きなさいというのです。しかもそれら知識たちが病人を囲んで坐る位置まで定められています。病人は北枕にして顔を西に向けて床に伏します。

ところで、知識の一人目はまさに善知識と称する人で、病人が顔を向けている西側に対峙して座ります。丁度、病者の顔を見ることのできる位置なのでしょう。そして、哀れみの心をもって病人から目を離さず、病人に往生の「勇みの心」を起こさせるために仏法の道理を説きなさいといひます。この知識を往生人が見て、あたかも観音菩薩のような想いを抱くと記されています。

二人目は、有験うげんの人です。有験とは有能な密教行者をいひます。病人に対して東側、要するに顔の反対側に、一・二尺離れて坐るように指示しています。そして一心に不動明王の慈救の神呪を念じなさいと述べます。それは魔界の障りを封じるためだということです。病人にとっては、あたかも枕辺に不動明王がいて、自分を守っていてくださる想いが抱けると記されています。ここに密教独自の知識が往生人のために加えられているのです。

三人目は念仏者です。病人の北側、すなわち頭の上の方向で、少し離れて坐ることを指示しています。役目は善知識の教えに併せて、間髪を入れずに磬かねをたたくことで、臨終時に病人に十声の念仏を満足に唱えさせることにあります。

四人目は持経者です。病気が緊急でないときなど、善知識が少し休んでいる間、静かに経を読んで、病人の心を澄ませる役をします。

最後の五人目は、いわゆる雑用係です。詳細な記載がありませんが、三人または五人というのは第四・五人目は往生に関して必ずしも必要ではないからでしょう。しかし前の三人は必ず病人の枕辺に居なければならないのです。

そこで、問題はこの「有験者」の存在です。『往生要集』にもこの存在は記載されていませんので、これこそ密教浄土教独自の存在だといえます。

臨終時における念仏者には絶えず悪魔が障碍を加えようとすると云います。いわゆる「魔縁」の存在です。

『往生要集』を著した恵心僧都源信の臨終時にも、源信が「悪死」の兆候が現れていないか大変気にしている様子が記されています。

傍らなる両三輩に語りて言。十五の悪死すでに免れぬ。これ久しく我いのる所なり（『恵心僧都絵詞伝下』『恵心僧都全集五付録』93頁）

そして、

また、人を勧めて食せしめ畢って問いて曰く。気色を見るに、十五の

悪死免るるや。人々答えて云く。御身に苦痛なく容顔つねのごとし。
さらに悪死の相ましますと。(同94頁)

このように源信ですら十五の悪死を気にしていたことが分かります。これは「大悲心陀羅尼を唱えれば十五の悪死を受けず十五の善生を得」と『千手千眼観世音大悲心陀羅尼經』にあるのによると思われませんが、それでも源信は驗者を念仏者の枕辺に侍らせるなどは『往生要集』には述べていません。しかし『孝養集』の撰者は臨終の枕辺で驗者によって「不動明王の慈救呪を念ぜよ」というのです。これによって、自力念仏者が往生出来るか出来ないかの正念場が「臨終の一念にある」ことがよくわかります。自力念仏者には常に「悪魔が来た」という「魔縁」を恐れねばならないのです。この「魔縁」は仏の姿をとることすらあるといわれますのでなおさらです。中巻の「第十に阿弥陀仏の白毫を觀ず」において「ただしこの觀念はよくよく用意あるべし」と前置きして

その故は不浄・驕慢の心を以て觀ずれば、魔縁、仏のまねして我が身心をたぶらかすと云えり。それを見分けるさまは、魔縁の光は左に廻る。また魔縁は目をふさぎて見れば見えぬ。仏は見え給う。もしおぼつかなき事あらば、よく鏡を以て道場の壁にかけて影を写して見よ。その故は、魔縁は人の目をばまよわせども己が影をしらず。せめて鏡なくば水をたたえて見よとなり(『孝養集』巻中・大日仏43~44頁)

と述べています。如来の白毫を觀念しておれば、大いに信ある人においては必ず仏を見ることが出来るという文章に続いて上の文があります。ですから「不浄な心や、驕慢な心を以て白毫觀を修したならば」「魔縁が仏の姿をとって現れ来る」というのです。ですから、仏を見ることが出来たと喜んでいられません。それが本当の仏か、悪魔が変じた仏の姿かを見極めねばならないからです。

その見極め方を著者は三点示します。

第一は、如来の白毫から出る光です。本当の仏であれば、右に廻った光を放たれるのですが、魔縁のそれは左に廻っているというのです。

第二は、魔縁の姿は目を開けているときは見ることが出来るのですが、目を閉じればその姿が見えないといえます。それに比べて、目を閉じてものはっきりと見えるのが真実の仏なのです。『觀無量壽經』の日想觀に、

日の没せんと欲して、狀、鼓を懸けたるがごとくなるを見るべし。すでに日を見ること已らば、閉目開目に、みな明了ならしめよ。これを日想とし、名づけて初めの觀といふ。(『註釈版聖典』93頁)

とありますが、まさにこれと同じことをいうのでしょう。

第三は、真実の仏の姿は鏡にも映るし、水面にも映るのですが、魔縁の姿は鏡にも水面にも映らないというのです。ですから念仏行者の部屋(道場)に「鏡を懸けて影を見せよ」とも書かれています。しかも、このような「魔縁」は「不浄・驕慢の心を以て」白毫觀を觀する時だけに現れるものではありません。

「魔縁は必ず仏を念ぜぬ間を伺う」とあります。すなわち具体的に、①心乱れるとき②湯殿にあるとき③物を食するとき④もしくは一人あるとき⑤腹の立つとき、の五つまでもが述べられています。食事をしているときや風呂に入っているときなども魔縁の訪れる時だということです。そこで「されば、かかる時も仏を忘れ給わざれ。心を努め、努め乱すことなかれ」と、片時も仏を念じることを忘れてはいけないというのです。これは大変な精神集中を課せられることとなります。

(四) 密教行者の驗力

このようにして現れた「魔縁」は、病者の死後をどのように導くのでしょうか。上巻の第十には「終人を六道には何の処に生ずべきか」の項目を設けて、「地獄に墮ちるに十五の相あり」に始まり、餓鬼に生まれるには八相、畜生には五相というように三悪道に生じることが分かる臨終時の病人の種々相を説いています。とても煩雑ですので全てを記述できませんが、地獄に墮ちる一相に、

妻・夫・從者を悪しき眼をしてにらむ

両の手を挙げて空をあがきはかる

餓鬼の相では、

身の熱きこと火のごとし

飢渴の聲をして嘆く

畜生の相では、

妻子を愛し思うて見ん事をむさぶりて捨てず

五体に遍じて汗を流す

などです。

このように、ひとたび魔縁の相が現れれば、直ちにこの「魔縁」を退治しなければなりません。ですからこれを如何に退治するかが問題です。いち早く手を施さねば極楽往生はかないません。そこを「もし病者に魔縁の障りをなして頭れ見れば、急に有驗の人、不動・大威徳の法をもって祈せよ」(『孝養集』巻中・大日仏62頁)。ここに密教行者としての驗者が必要なのです。驗者によって不動・大威徳の密教の修法を施すことによって魔縁を退けるからです。一方、善知識には「魔縁を出離すべき教化をなせ」(同頁)とも指示しています。まさに臨終時における緊急事態が発生した様子が見て取れます。地獄に行くか、それとも極楽に往生できるかの瀬戸際です。ここで特に不動明王の修法こそ大いなる効驗があるというのです。「殊に不動明王。これらの法を真言師を請じて行ぜしめば、魔縁遠く去り罪障消滅して、往生すること安かるべし」とあります。

私はこれらの浄土教の教義を見ておりますと、つくづく真宗のありがたさが身にしみてきます。皆さんは如何でしょうか。

(龍谷大学教授：仏教担当)